

源氏物語

関屋

紫式部

青空文庫

逢坂は関の清水も恋人のあつき涙もな

がるるところ

(晶子)

以前の伊予介は院がお崩れになった翌年常陸介になって任地へ下ったので、昔の帚木もつれて行った。源氏が須磨へ引きこもった噂も、遠い国で聞いて、悲しく思いやらないのではなかったが、音信をする便すらなくて、筑波おろしに落ち着かぬ心を抱きながら消息の絶えた年月を空蟬は重ねたのである。限定された国司の任期とは違って、いつを限りとも予想されなかった源氏の放浪の旅も終わって、帰京した翌年の秋に常陸介は国を立つて来た。一行が逢坂の関を越えようとする日は、偶然にも源氏が石山寺へ願ほどきに参詣する日であった。京から以前紀伊守であった息子その他の人が迎えに来ていて源氏の石山詣でを告げた。途中が混雑するであろうから、こちらは早く逢坂山を越えておこうとして、常陸介は夜明けに近江の宿を立つて道を急いだのであるが、女車が多くてはかがゆかない。打出の浜を来るころに、源氏はもう粟田山を越えたということで、前駆を勤めている者が無数に東へ向かって来た。道を譲るくらいでは済まない人数なのであつ

たから、関山で常陸の一行は皆下馬してしまつて、あちらこちらの杉の下に車などを昇ぎおろして、木の間にかしこまりながら源氏の通過を目送しようとした。女車も一部分はあとへ残し、一部分は先へやりなどしてあつたのであるが、なおそれでも族類の多い派手な地方長官の一門と見えた。そこには十台ほどの車があつて、外に出した袖の色の好みは田舎びずにきれいであつた。齋宮の下向の日に出る物見車が思われた。源氏の光がまた發揮される時代になつていて、希望して来た多数の随従者は常陸の一行に皆目を留めて過ぎた。九月の三十日であつたから、山の紅葉は濃く淡く紅を重ねた間に、霜枯れの草の黄が混じつて見渡される逢坂山の関の口から、またさつと一度に出て来た襖姿の侍たちの旅装の厚織物やくくり染めなどは一種の美をなしていた。源氏の車は簾がおろされていた。今は右衛門佐になつている昔の小君を近くへ呼んで、

「今日こうして関迎えをした私を姉さんは無関心にも見まいね」

などと言つた。心のうちにはいろいろな思いが浮かんで来て、恋しい人と直接言葉がかわしたかつた源氏であるが、人目の多い場所ではどうしようもないことであつた。女も悲しかつた。昔が昨日のように思われて、煩悶もそれに続いた煩悶がされた。

行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水しみづと人は見るらん

自分のこの心持ちはお知りにならないであろうと思うとはかなまれた。

源氏が石山寺を出る日に右衛門佐が迎えに来た。源氏に従って寺へ来ずに、姉夫婦といっしょに京へはいつてしまったことを佐すけは謝した。少年の時から非常に源氏に愛されていて、源氏の推薦で官につくこともできた恩もあるのであるが、源氏の免職されたころ、当路者ににらまれることを恐れて常陸へ行ってしまったことで、少しおもしろくなく源氏は思っていたが、だれにもそのことは言わなかった。昔ほどではないがその後も右衛門佐うえもんすけは家に属した男として源氏の庇護ひごを受けることになっていた。紀伊守きいのかみといった男も今はずかな河内守かわちのかみであった。その弟の右近衛うこんえのじょう丞で解職されて、須磨へ源氏について行った男が特別に取り立てられていくのを見て、右衛門佐も河内守も過去の非を悔いた。なぜ一時の損得などを大事に考えたのであろうと自身を責めていた。

佐すけを呼び出して、源氏は姉君へ手紙をことづてたいと言った。他の人ならもう忘れていそうな恋を、なおも思い捨てない源氏に右衛門佐は驚いていた。

あの日私は、あなたとの縁はよくよく前生で堅く結ばれて来たものであろうと感じまし

だが、あなたは どうお思いになりましたか。

わくらはに行き逢ふみちを頼みしもなほかひなしや塩ならぬ海

あなたの関守せきもりがどんなにうらやましかったか。

という手紙である。

「あれから長い時間がたっていて、きまりの悪い気もするが、忘れない私の心ではいつも現在の恋人のつもりでいるよ。でもこんなことをしてはいつそう嫌われるのではないかね」

こう言つて源氏は渡した。佐はもつたいたない気がしながら受け取つて姉の所へ持参した。「ぜひお返事をしてください。以前どおりにはしてくださらないだろう、疎外されるだろうと私は覚悟していましたが、やはり同じように親切にしてくださるのですよ。この使いだけは困ると思いましたが、お断わりなどできるものじゃありません。女のあなたがあの御愛情にほだされるのは当然で、だれも罪とは考えませんよ」

などと右衛門佐は姉に言うのであった。今はましてがらでない気がする空蟬うつせみであったが、久しぶりで得た源氏の文字に思わずほんとうの心が引き出されたか返事を書いた。

逢坂あふさかの関やいかなる関なれば繁しげきなげきの中を分くらん

夢のような気がいたしました。

とある。恨めしかつた点でも、恋しかつた点でも源氏には忘れがたい人であつたから、なおおりおりは空蟬の心を動かそうとする手紙を書いた。そのうち常陸ひたちのすけ介は老齡のせいか病氣ばかりするようになって、前途を心細がり、悲観してしまい、息子むすこたちに空蟬のこゝとばかりをくどく遺言していた。

「何もかも私の妻の意志どおりにせい。私の生きている時と同じように仕えねばならん」と繰り返すのである。空蟬は薄命な自分はこの良人おとこにまで死別して、またも險けわしい世の中に漂泊さすらえるのであろうかと歎なげいている様子を、常陸介は病床に見ると死ぬことが苦しく思われた。生きていたいと思つても、それは自己の意志だけでどうすることもできないことであつたから、せめて愛妻のために魂だけをこの世に残して置きたい、自分の息子たちの心も絶対には信ぜられないのであるからと、言いもし、思いもして悲しんだがやはり死んでしまった。息子たちが、当分は、

「あんなに父が頼んでいったのだから」

と表面だけでも言っていてくれたが、空蟬の堪えられないような意地の悪さが追い追いついて来た。世間ありきたりの法則どおりに継母はこうして苦しめられるのであると思つて、空蟬はすべてを自身の薄命のせいにして悲しんでいた。河内守だけは好色な心から、継母に今も追従をして、

「父があんなにあなたのことを頼んで行かれたのですから、無力ですが、それでもあなたの御用は勤めたいと思いますから、遠慮をなさらないでください」

などと言つて来るのである。あさましい下したころ心こころも空蟬は知っていた。不幸な自分は良人に死に別れただけで済まず、またまたこんな情けないことが近づいてこようとすると悲しがつて、だれにも相談をせずに尼になつてしまつた。常陸介の息子や娘もさすがにこれを惜しがつた。河内守は恨めしかつた。

「私をきらつて尼におなりになつたつてまだ今後長く生きて行かねばならないのだから、どうして生活をするつもりだろう、余計なことをしたものだ」
などと言つた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

関屋

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>